

「平成29年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	白河市立白河第二中学校、みさか小学校
推進協力校名	白河市立白河第二小学校

「授業スタンダード」を活用した「ARCS」、 「4つの指導技術」による授業改善

白河市では、白河市立白河第二中学校（パイロット校Ⅰ）、白河市立みさか小学校（パイロット校Ⅱ）、白河市立白河第二小学校（推進協力校）の3校が、学びのスタンダード推進事業に取り組んでいる。

それぞれが市の中心校として、現職教育や研究公開を通して授業改善と指導力向上に取り組み、その成果を発表している。今年度より「学びのスタンダード」推進事業を受け、いずれの学校においても、「授業スタンダード」を研究のベースに置きながら、白河第二中学校では「ARCSモデル」を、みさか小学校、白河第二小学校では「4つの指導技術」を通して授業改善に取り組んだ。

1 推進地域における「授業スタンダード」の活用について

- (1) 「授業スタンダード」の理解
「授業スタンダード」の活用にあたり、教員全員で読み合わせを実施し、授業スタンダードをどう活用するかを確認した。
- (2) 学習過程の視覚化
「授業スタンダード」に示されている学習過程を参考に、めあて、自力解決、まとめなどカード化し、板書に使用した。
- (3) 教師の指導技術の向上
「授業スタンダード」に記載されている板書・机間指導・発問・ノートなどの指導技術のポイントについて実践した。特に発問については、授業スタンダードにある具体的なパターンを抜き出し、常に目の届くところに掲げておくようにした。
- (4) 目指す授業像の具体化の手立て
学校課題研究計画の手立てを「授業スタンダード」の中から設定し、指導案作成の際には、その手立てを必ず取り入れて、その成果と課題について話し合った。
- (5) チェックシートの活用
普段の授業の振り返りや、研究授業のあとの振り返りの観点として活用した。
- (6) 学習意欲の4つの側面（ARCSモデルの考え）を生かした授業づくり
「授業スタンダード」の「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」の項目で述べられている学習意欲を、J. M. ケラーのARCSモデルの考えに基づいて分析し、授業づくりと生徒の実態把握に生かした。

2 パイロット校（Ⅰ 白河第二中学校 Ⅱ みさか小学校）の取組内容

- (1) 中学校の英語科・数学科における「タテ持ち」の取組について
英語科における「タテ持ち」については、英語科6名のうち、そ

【英語科における「タテ持ち」】

	1組	2組	3組	4組	5組	6組
1学年	A	A	B	B	C	C
2学年	A	D	D	B	D	D
3学年	E	E	E	E	F	C

それぞれの学年を3名の教師で分担し、A、B、C 3名は複数学年を担当している。教科部会は時間割に設定していない。

【数学科における「タテ持ち」】

	1組	2組	3組	4組	5組	6組
1学年	A	A	A	A	B	B
2学年	C	C	C	C	B	B
3学年	D	D	D	E	E	E

また、数学科における「タテ持ち」については、数学科5名のうち、それぞれの学年を2名の教師で分担し、B 1名が複数学年を担当している。

(2) 小学校における「教科担任制」の取組について

① 5年生における取組

<年間を通して>

- ・ 1組担任が2クラスの社会科を指導
- ・ 2組担任が2クラスの理科を指導
- ・ 教務が2クラスの音楽を指導
- ・ 専科が2クラスの書写を指導



【タテ持ちの授業における学び合い】

教科	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	家庭	図工	体育	道徳	学活	総合	英語
1組	A	D	A	A	B	C	A	A	AB	A	A	A	AE
2組	B	D	A	B	B	C	B	B	AB	B	B	B	BE

A:1組担任 B:2組担任 C:教務 D:専科 E:ALT

② 6年生における取組

<一部の単元で>

- ・ 1組担任が2クラスの国語科を指導
- ・ 2組担任が2クラスの算数科を指導

<年間を通して>

- ・ 1組担任が2クラスの社会科を指導
- ・ 2組担任が2クラスの理科を指導
- ・ 教頭が2クラスの書写を指導
- ・ 研修が2クラスの音楽を指導

教科	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	家庭	図工	体育	道徳	学活	総合	英語
1組	※A	C	A	※A	B	D	A	A	AB	A	A	A	AE
2組	※B	C	A	※B	B	D	B	B	AB	B	B	B	BE

A:1組担任 B:2組担任 C:教頭 D:研修 E:ALT ※一部単元で実施

(3) 推進教師の役割と具体的な取組

- ① 「学びのスタンダード」の活用の推進
- ② 研究計画作成と実施に向けての連絡調整
- ③ 校内研究の推進・研修だよりの発行
- ④ 教科担任としての授業の実施
- ⑤ 「学び合う会（教師相互の勉強会）」の計画・運営



【教科担任による理科の授業】

3 推進協力校(白河第二小学校)の取組内容

(1) 「学びのスタンダード」推進事業に伴う要請訪問の実施

「学びのスタンダード」推進事業の推進協力校となり、これまで年間4回程度しか行えなかった要請訪問を、全担任とTT教員の合わせて18回行うことができた。本校で

は、4教科（国語科・社会科・算数科・理科）と特別支援教育の研究を推進しており、毎回の要請訪問の授業ごとに、県南教育事務所の各教科及び特別支援教育の担当指導主事に授業を参観していただくことができた。その後の事後研究会では、授業の内容や指導方法、教科の本質等についてご指導いただくことができた。また、授業や授業周辺部、毎日の実践に取り入れることのできるたくさんの資料もいただき、大変実りのある研修会となった。

(2) 「授業スタンダード」の位置付け

白河第二小学校では、『授業スタンダード』と、現職教育でこれまで研究してきた『授業を変える12の視点』及び『4つの授業技術』とを関連させた授業づくりを心がけ、教師の指導力の向上を図り、子どもたちの主体的学習態度と学び方を育ててきた。特に今年度は、全ての学級・全ての教師が同じ指導ができることを目指し、『4つの指導技術』に重点を置き、日々の授業の中で取り組んできた。



【4年国語科における「発言回し」】

(3) 現職教育の重点『4つの指導技術』と『授業のスタンダード』との関連

- ① 「発問の完全成立」「発問への完全反応」（発問に関する指導技術）
- ② 「教師の軌跡」（机間指導・話し合いのコーディネートに関する指導技術）
- ③ 「発言回し」（話し合いのコーディネートに関する指導技術）
- ④ 「構造的な板書」（板書に関する指導技術）

(4) パイロット校と連携した授業スタンダードに基づく授業公開について

現職教育の全体授業として『指定授業』を年4回（国語科・社会科・算数科・理科）位置付け、パイロット校2校（みさか小、白河二中）以外にも、県南地区の小・中学校全校へ案内を出し、研修の機会として活用していただくことができた。また、県南地区の中学校からも参観者があり、授業に対する感想をいただくよい機会にすることができた。

4 成果と次年度へ向けて

(1) 成果

- 「授業スタンダード」をよりどころとして、授業の基本的な指導過程を身に付けるとともに、指導技術を磨くことの大切さを再確認することができた。
- 互いにより良い授業を目指して学び合う意識が向上した。
- 教科担任制は授業充実だけではなく、生徒指導面でも効果的であることが分かった。
- 「学び合う会」を若手の教員を中心に毎回10名以上の参加で行うことができた。実際に参加している教員からは「先輩の先生方から学べる機会はとてもありがたい」「普段の悩みを聞いてもらったりしてとても有意義な時間である」など、教員集団の同僚性が高まり、互いに学び合おうとする実践意欲の高まりが感じられた。

(2) 次年度に向けて

- 実態に合った手立ての重点化
- 学校全体での基本的な学習の仕方の徹底
- 「家庭学習スタンダード」の活用
- 家庭学習の手引きの作成・活用
- 「タテ持ち」の更なる充実と実践
- 専門性の問題や時数の問題等について検討した「教科担任制」の実践



研修だより

みさか小学校 研修部

NO 2

平成29年6月5日(月)

パイオニア授業お世話になりました

先日はお忙しい中、パイオニア授業を参観していただきありがとうございました。授業スタンダードを生かした、思考力・判断力・表現力を高める授業というのは、どのようなものなのか、自問自答しながら指導案を作成しました。今回の授業の一番の問題点は、「はじめ」「中」「終わり」を見つける活動と、「問い」と「答え」を見つける活動の二つの中身が1時間に含まれていたことだったのではないかと思います。指導書でそのような流れになっていることから、その流れにあまり違和感を持たずに指導案を作成してしまいました。どちらかに絞って、もっと子どもたちの意見をたくさん出させ、話し合うことで結論を導き出していければよかったですと思いました。授業チェックシートでも、話し合いのコーディネートでの評価が低く、反省させられた次第です。教師がしゃべりすぎてしまい、子どもの意見で作り上げる授業にならなかったことが残念でした。今後は、子どもたちの多様な意見、教師のコーディネート力の光る授業を目指したいと思います。事後研究会でのスタンダードの活用の仕方や、指導案への明記の仕方などについては共通理解を図ることができたかと思います。今後の授業に役に立つ部分を生かしていただければと思います。お世話になりました。

6月の研修関係予定

- 9日(金)・・・ブロック会(指導案検討)
- 15日(木)・・・ブロック会(指導案検討) ※指導主事来校
低学年<齋藤 雅彦先生>、中学年<渡邊 康一先生>、高学年<芳賀 淳先生>
- 23日(金)・・・全体会(全国学力テスト分析)
- 26日(月)・・・校内授業研究会 10:40~11:25(2年1組 鶴水 裕美先生:国語)
事後研究会 15:15~16:15(低学年ブロック) ※齋藤 雅彦先生
- 27日(火)・・・校内授業研究会 10:40~11:25(4年2組 矢吹 真智子先生:算数)
事後研究会 15:15~16:15(中学年ブロック) ※渡邊 康一先生
- 28日(水)・・・校内授業研究会 10:40~11:25(5年1組 伊東 恭一先生:国語)
事後研究会 15:15~16:15(高学年ブロック) ※齋藤 雅彦先生
- 30日(金)・・・全体会(各ブロックより事後研究会の報告)

～裏あります!～



お知らせ・お願い

☆ 6月は定着確認シートのサンプル校に当たっています。5・6年の社会、4・5・6年の理科を実施し結果を報告するようになります。6月22日に原本配布します。6月中に実施し、採点をしたものを研修主任まで提出してください。

☆ 授業の中での各段階の掲示カード、授業スタンダードでの発問の例と授業チェックシートを作成しました。どうぞ教室において、日々の授業で活用してください。

☆ 子どもたちの筆箱の中身、机の上におく文房具などについての共通理解を図りたいと思います。次回ブロック会の折にブロックでの意見を出していただければと思います。よろしくをお願いします。

☆ 学力向上グランドデザインマネジメントワークシートを作成しました。週案にはさんで学期末に反省を記入してください。どうぞよろしくお願いします。



研修だより

みさか小学校 研修部

NO 3

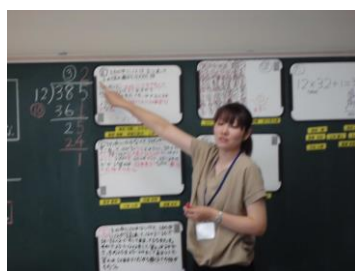
平成29年7月4日(火)

第1・2・3回校内授業研究会お世話になりました

先週は、3つの授業研究会が行われました。お忙しい中、授業を提供してくださった鶴水先生、矢吹先生、伊東先生、本当にありがとうございました。今回の授業研究会では、どの学級も子どもたちの学習態度が大変よく、学習訓練がしっかりなされていると指導の先生方からお褒めの言葉をいただきました。日頃の先生方のご指導の賜物です。すばらしいですね。それぞれの事後研究会の詳しい内容については各部会の記録をご覧ください。たくさんのことを学ぶことができた授業研究会でした。今回の成果と課題を生かして今後の研修を進めていきましょう。研究授業向けの各ブロックでの事前研や模擬授業の実施、教材の準備など様々な準備・協力、ありがとうございました。

今回の3つの授業研究会で共通して出されたものとして、以下の7点があげられます。次回の授業研究ではここを特に意識して授業を行っていきましょう。

- ① 学級づくりが授業の基盤。学習訓練をしっかりと。
- ② めあてとまとめの整合性を持たせる。
- ③ 効果的な板書を計画する。(ノート指導も含めて)
- ④ 子どもたちの交流・話し合いのさせ方の指導。
- ⑤ 全体での話し合いの教師のコーディネート工夫。
- ⑥ 授業の中心(ねらい)を考えた時間配分。45分にまとめる。
- ⑦ カードを積極的に使って授業の流れを子どもたちに示す。



～裏もあります!～

7・8月の研修関係予定

7月

- 14日（金）15：15～16：15・・・ブロック会（9月の研究授業の指導案検討）
※指導主事来校
低学年＜先崎真奈美先生＞、中学年＜齋藤雅彦先生＞、高学年＜渡辺隆博先生＞

8月

- 24日（木）13：00～15：00・・・研修全体会（2学期の研修日程の確認）、
ブロック会（指導案検討）
※指導主事来校＜算数：邊見年成先生、国語：齋藤雅彦先生＞
※9月の研究授業の指導案検討をメインに11月の公開授業の指導案検討も行う。

お知らせ・お願い

- ☆ 7月10日（月）の放課後学習は、打ち合わせの時間確保のため、なしになりました。
- ☆ 9月の授業者の先生は、今週末までに、授業を行う単元と時間を研修に教えてください。 指導の先生に指導書のコピーを送ります。
- ☆ 11月の公開授業の授業者の先生は夏休み前に、単元と時間を研修に教えてください。 指導の先生に指導書のコピーを送ります。

【白河第二小学校資料】 4つの指導技術

○日々の授業で基本的な指導技術を意識する

- ・この指導技術は、4月のスタートからやらないとできません。
- ・2年生以上は、実践する内容と意味を子どもたちにも話しておくといと思います。
- ・できそうにないと思っても、やってみてください。やる気が大事です。

①「発問の完全成立」「発問への完全反応」

◆ 発問は全員に発するもの「発問の完全成立」

- (1) 教師
- ① 声の大きさ
 - ・全体に聞こえる声で
 - ・時には小さい声で
 - ② 括弧で括るように
 - ・声の調子を変える
 - ・声の速さを変える
 - ③ 一度の発問で伝わるように
 - ・内容をよく吟味して話す
 - ・言葉をよく吟味して話す
- (2) 子ども
- ① 教師に目を、気持ちを向かせる
 - ・全員の動きを止め、教師を見させる
 - ・「話す人に目を向けること」を約束し徹底する
 - ② 最後まで聞かせる
 - ・声を重ねさせない

など

◆ 発問に全員が反応する「発問への完全反応」

まず、「全員で授業を創っていく」ことを話し、約束事を決める

- みんなで意見を言い合う
 - 分かったら必ず手を挙げる
 - 同じことでもいいから自分の言葉で発表する
 - 学級のルールづくり
- 「答えは間違えてもいいんだよ。」 → 笑わない、馬鹿にしない
- ※ 教師は、正解の発表だけを求めようとする傾向がある。間違いの中からさえも価値を見いだしていく努力が必要である。

(1) 教師

- ① 完全反応を期待した発問をしたら ～ 必ず全員に挙手をさせる ～
 - 待ってみる
 - 何人手を挙げているか数える
 - 発問が伝わっていないときは ----- ・もう一度しっかり括弧で括って発問する。
 - 答えが分からない（認知面） ----- ・既習事項であったらノート、教科書等を見るように指示する。（一斉や机間指導）
・分かった子や教師からのヒントを与える。
・近くの友達と話し合う。
 - 答え方が分からない（技能面） ---- ・普段から教えておくが、机間指導の時に再度言い方（答え方）を教える。
 - 言いたくない（情意面） ----- ・机間指導の時、本人の考えを聞いて安心させる。
自信がない
恥ずかしい
・近くの友達と話し合わせることで、自信を持たせたり、安心させたりする。
 - 全員挙手ができたら、「みんなが挙手できたことを喜ぶ」
発表したくない子は手を下ろさせることも
- ② 発表させる
 - 一人で終わらせない。同じでも何人かに発表させる。 → 発言回しへ
 - ※ 話し方や聞き方の指導も一緒にやる
 - 教師はコーディネーター役

など

② 「教師の軌跡」

- ① 話す子どもの遠くに立つ。 → 他の子どもたちへ向かって、しっかりと伝わるように、(話す子どもへの指導をする) 話し方を指導する。(相手意識を持たせる)
- ② 話す子どもの近くに立つ。 → 話す子へ目を向けてしっかり聞いているか、聞き方の(聞く子どもへの指導をする) 指導をする。
- ③ 黒板の前だけで授業をせず、個別に関わる。(机間指導目的の明確化)

③ 「発言回し」

[子どもに対して]

- ① 発問に対して、自分の考えを持たせる。(発問への完全反応)
「分からないことは何か」「疑問に思うことは何か」「その理由は何か」「どうすることか説明して」「どういう考えなの」など、まとまった考えや意見を述べなければならないような発問をし、甘えのない「反応」を要求する。
- ② 話すときは、教師ではなく友達に向かってはっきりと話させる。(相手意識)
- ③ 友達の発言に対して反応させる。(頷き、呟き、友達の発言を受けての自分の考え)
友だちの意見に対し「同じ」「違う」「分からない」、何かは反応できるはずである。

[教師は]

- ① 一人の子どもの発言を受けて、「〇〇さんは、～とっているが、君はどう思うか。」というように発言回しの音頭取りをする。教師が付け加えたり補説をしたりという事をなるべくしないで、子どもに振る。
- ② 「分からない」や「間違い」の中からでさえも価値を見出していく努力をする。

④ 「構造的板書」の工夫

- ① 順序や分類など目的に応じた整理(構造化)
- ② 板書する内容の吟味(反応を板書するのはAll or Nothing)
- ③ 交流の場として活用
- ④ チョークの色(本校では「問い」を黄色、「まとめ」を赤色としている。)

授業を変える12の視点

1 実態と教材

学習は「個に成立する」といいながら、
「子どもたちは～」「生徒たちは～」「児童は～」という集団として把握していないか。



実態把握は、これから学習する教材に対して、子ども一人一人がどの程度の既習経験・既知を持っているか、どの程度の基礎基本を備えているか、学び方の傾向はどうか、そういったことを個々に捉えることではないか。

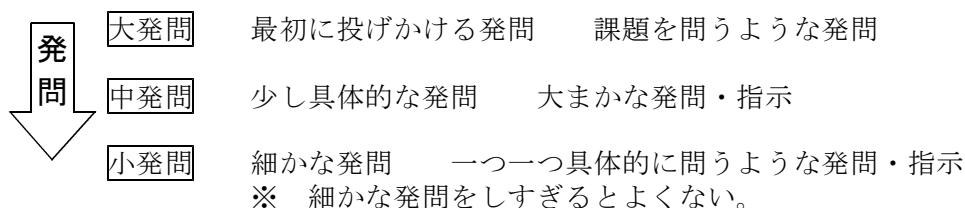
2 教材と課題

目標に直結する教材・目標に直結する課題

↳ その課題を追究し、解決することが目標の到達になるという仕組み

- ◆ 課題や活動が目標に直結しないという授業が多いのでは？

3 課題と発問



- ◇ 発問を構造的に行っていくこと。

4 発問と指名

- ・「発問の完全成立」と「発問への完全反応」
- ・発問の成立
全ての子どもに届いて、伝わって、理解されて「なんぼ」
- ・発問への反応
全ての子どもが「わかる」「分からない」「反応の意志がない」を表現して「なんぼ」
- ・発問から指名までの時間
- ・発問後、せめて挙手数を数える
- ・発問は、カギ括弧で括り、明瞭に話す

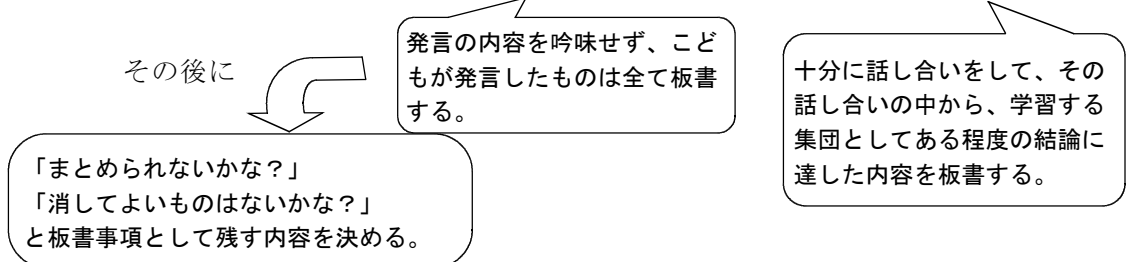
5 指名と板書

◆板書の問題点

- ・板書案（計画）に固執しすぎる → 生きて、変化し続ける子どもの反応を予測しきれぬか？
- ・左上から右下に向かって書く → 板書を書くために、子どもを指名していないか？
- ・板書される発言とされない発言がある → 先生が考えてほしいことは何か考えていない？

◇板書、何をどう書くか

①反応を板書するのはAll（未確定事項の板書）or Nothing（確定事項の板書）



※「消す」ことも有効な手段となる。

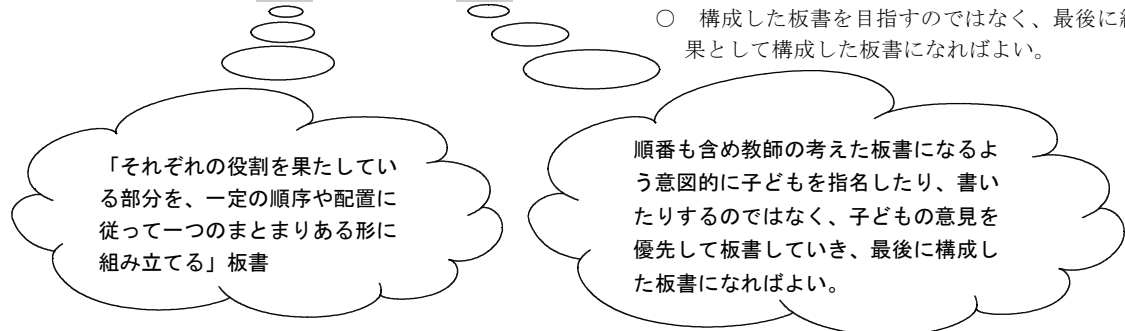
子どもから出された意見を子どもたち自身の話し合いで「必要ない、馴染まない、違う」となったときには、~~訂正したり~~、消去したりすることも有効な手段である。（書き加えたり、メモ代わりに使ったりすることも有効。）

②構造的板書へ

時系列板書 → 構成板書 → 構造板書

*構造とは？……構成のしかた

- 構成した板書を目指すのではなく、最後に結果として構成した板書になればよい。



6 板書とノート

◆「先生！書くんですか？」と、子どもから声が聞こえるということは、

長い時間をかけて子どもの主体性を潰してきた成果である。

◆「ノートしてもいいよ。」という優しさ

「書きなさい」の方がまだいい。学校は、ついに「書くべき内容と書かなくてもよい内容を主体的に判断して、実践できる子ども」を育てることができなかつたのである。

◎30人いれば30通りのノートがあるべき

- ・板書を写すだけのノートはおもしろくない。もっと記号や絵、イラスト、矢印などを多用した個性的なノートを作らせた。
- ・正しく記録することのみに使われて、~~訂正したり~~、消去したり、書き加えたり、メモに使ったりすることが少ないのでは？

7 ノートと発表

挙手しない子どもの3つの理由（3つの側面から）

- 分かる（認知面）…………… 分からない〔発表する内容を持っていない〕
- できる（技能面）…………… できない〔発表する方法に自信がない〕
- やろうとする（情意面）… やろうとしない〔発言する気にならない〕



発表させたいなら、面倒でも、発表内容をノートに書かせるべき。それで、「発表する内容」は持つことになる。

8 発表と話し合い

◆話し合いができないのはなぜか？

- ・子どもは、自分の考えや意見を述べることになれていない。
- ・T-Cの連続であり、他者は傍観傍聴を学習してしまった。



◎ 「分からないことは何か」「疑問に思うことは何か」「その理由は何か」「どうすることか説明して」「どういう考えなの」など、まとまった考えや意見を述べなければならぬような発問をし、甘えのない「反応」を要求する。

◎ 友達の話聞く訓練は、その話に自分が反応しなければならないという緊張感を持たせて行うべきである。

◎ 教師はしばらくの間、「彼は、『～』と言っているが、君はどうか。」という、発言回しの音頭取りをすべきである。

9 話し合いと学び方

学び方は、ある意味で「型」、すなわち「定まった姿や動作」である。



それぞれの教科、特有の「学びの型」がある。その「型」を身に付けることは、自分一人でも学習を進めていけるという「自学自習」の能力を培うことでもある。

そうした「型」を身に付けた子どもが、集団で問題解決に挑むとき、「型」は同じだが、その内容、つまり「疑問、驚き、矛盾、対立、葛藤、陶冶、利害など」の違いをはじめ、解決の「方法」、時に解決の「辿り着くところ」には違いがある。

そこに、よりよい解決を目指した「話し合い」の意義がある。

10 学び方と問題解決学習

誰のための問題解決か。

- ・教師には、はじめから教えたい問題解決の仕方がある。
- ・子どもは、予想を超えた意外な解決をする場合がある。

◆子どものさまざまな学びや解決方法を受け入れられないのは

- ① 深く幅広い教材研究をしていないからである。
- ② 子ども一人一人を捉えきれていないからである。
- ③ 教師自らの問題解決を教えていないからである。

11 問題解決学習とドリル

◎問題解決学習で最も大切なのは子ども一人一人の「拘りのある」問題意識である。

↳ 疑問、驚き、矛盾、対立、葛藤、陶冶、利害などの内在

◆問題解決は手間と時間がかかる。
学習の進度が遅れる心配がある。

↳ それこそプロとして上手に「教え込む」授業があってもいいと考えている。
「練習を強制する」授業があってもいい。
ただ、そればかりではダメで、バランスが必要である。

人間を育てる教育ができないということです。
人格の完成を目指していないことになります。

12 ドリルと学習速度

◎読み書き計算は大事です。

↓
↳ これを継続的にやると、学力偏差値も上がります。
前頭前野が活性化して、学習によい影響があるでしょう。
読み書き計算、朝ご飯で子どもは変わり、学校も変わります。

ドリルは、慣れや習慣化が、学習にもよい影響を与え、読むことも書くことも計算することも「速く」なります。しかし、確かになったり、深まったりすることは期待できません。

まして、「分からない」ことが「分かる」ようにはならないのです。教育は、実態に応じて「手をかけること」なのです。

「ふくしまの『家庭学習スタンダード』」の活用について

～白河二中スタンダード～

白河二中は、「学びのスタンダード」推進事業における研究パイロット校であるので、『家庭学習スタンダード』についても、その活用方法のアイデアと実践事例、そして、その効果・評価、さらにはそれを踏まえた改善策などの提供にも積極的に取り組まなければなりません。以下のアイデアのみならず、先生方の積極的な活用方法のアイデア提供を期待します。

1 『家庭学習スタンダード』の作成と配付の目的

家庭学習に対する学校と家庭・地域がそれぞれの役割をお互いに理解し、連携・協力して生徒を指導・支援することを通して、家庭学習の質の向上を図っていくこと。

2 家庭学習の意義

- (1) 学力向上のために、学校の授業内容を補い、その定着を図るもの。
- (2) 学力向上の最終目的は、生徒の希望進路の実現。
- (3) 家庭学習習慣の確立。「生きる力＝自主性・自律性＝自己マネジメント力」の育成)

3 『家庭学習スタンダード』配付まで

- (1) 1月17日(水)職員会議
 - ・・・『家庭学習スタンダード』の意義・内容と配付までの日程・取組内容を確認
- (2) 1月22日(月)学級活動 or 短学活(5～10分間)
 - ・・・生徒に対し、リーフレットを使って説明する
 - ① 主に「表紙」の「自己マネジメント力」＝「R-PDCAサイクルを通して、自分で学習や生活を改善する力」を身に付けることの大切さについて述べる。
 - ② 見開き・裏表紙については「主に保護者に理解していただきたいこと」程度の内容にとどめ、保護者に対しては、併せて配付したプリントをよく読んでいただくように伝えるよう生徒に指示する。
- (3) (2)で生徒へ手渡すことで保護者への配付とする。
- (4) 1月23日(火)～26日(金)・・・2月中旬
 - ① 「学年だより」などで配付した旨、取り上げる。
 - ② 生徒に手渡したかどうか口頭で確かめる。その際、保護者が読んでどのような感想を言っていたか(セリフを漏らしたか)情報収集し、教頭に伝えてもらえるとありがたい(努力事項ではありません)。
 - ③ 部活動、2月の学年保護者会で話題として取り上げ、感想、活用状況の情報収集をする。(場合によっては学校でとる手段のてこ入れが必要なのか考える)

4 学校としての活用方法について(必ず実践して、効果についての情報収集も行う)

- (1) 「たより」での記事・・・事例とともに吹き出しの表現をそのまま使うことも効果あり?
[例] 中間・期末テスト前の家庭学習充実のために
- (2) 「学年保護者会」での話題
[例] 春休みの家庭学習状況チェック材料として(2月)、年度始めの家庭学習習慣確立の大切さについての意識付けの話題として(4月)
- (3) 「教育相談」「家庭訪問」「三者面談」の際の話題
[例] 必ず手元に置く。チャンスがあれば、実物を見せながら話すと効果が高い。保護者には持参していただくのもあり。
- (4) 1月中旬に義務教育課ホームページにアップされる予定(保護者の紛失対応可)